

資料紹介

湯前まんが美術館所蔵那須良輔風刺画資料について

*1 中尾章太郎

*1 湯前まんが美術館-那須良輔記念館-

キーワード：那須良輔，風刺画，風刺漫画，昭和史，湯前まんが美術館

1.はじめに

「湯前まんが美術館—那須良輔記念館一」（以下、「まんが美術館」）は、1992（平成4）年、熊本県球磨郡湯前町に設立された、湯前町直営の美術館（種別：登録博物館）である。当時、全国的にも「マンガ」に関連する資料の保存・展示をテーマにした公立の美術館は希少で、埼玉県さいたま市の「さいたま市立漫画会館」（1966（昭和41）年設立。当時は「大宮市立漫画会館」）や、長野県千曲市の「千曲ふる里漫画館」（1990（平成2）年設立。当時は「更埴ふる里漫画館」）などに次ぐ公立・直営のマンガミュージアムだった。設立理念としては、湯前町出身の政治風刺漫画家、那須良輔の業績を後世に伝える「記念館」としての位置づけがされている。

しかし、まんが美術館が収蔵する那須良輔作品及び関連資料のほとんどは、開館後は館外で展示されることがなく、研究成果はおろか資料の点数や内容についてもほぼ公表されてこなかった。公式に出されたものとしては、開館直前に発行された図録『湯前まんが美術館 館蔵品図録Ⅰ』（湯前まんが美術館、1992）が最後である。全国的にも決して数が多いとはいえない風刺漫画家の記念館として、その収蔵品が広く一般に公開されてこなかったことは、風刺漫画というマンガ表現のジャンル自体が衰退の一途をたどる中、悔やむべきことである。

本稿は、当館が収蔵する那須良輔資料について、はなはだ簡単ではあるが紹介し、その時代背景や制作意図がわかるものに関しては解説を加えるものである。開館から既に31年が経過した中、収蔵資料数の把握や作品調査に繋がるデジタルアーカイブ（作品撮影・電子台帳への登録）の作業は令和2年度にようやく始まったばかりであり、当方でも現状把握できているのは原画の総数（絵画作品、漫画原画等合わせて7,213点。個人宛の葉書や色紙を含まず）のみに留まっている。現在、各種のメディアに掲載された作品や、画風・使用画材の違い等による資料の詳細な分類を行い、各種資料の数を整理している最中である点をご容赦願いたい。なお、特記なき限り、那須が制作した風刺漫画作品については、当時のメディアにおける主流の表記を踏襲して「漫画」、広くマンガ表現一般を取り上げる際は「マンガ」と表記する。

2.那須良輔の来歴

作品紹介に移る前に、那須良輔の来歴を簡潔に紹介する。なお、特記なき限り、本章の内容は那須の自伝『漫画家生活50年』（平凡社 1985）の内容に基づく。

那須良輔は、1913（大正2）年、熊本県球磨郡湯前村（現・湯前町）に生まれた。那須（1985）や、那須（1985-1987）⁽¹⁾によれば、幼い頃より球磨川、市房山など、湯前村・人吉球磨地域の豊かな自然に親しみ、天真爛漫な少年時代を送ったという。身近な野鳥や馬を地面に描いて遊んでいるうちに絵心が育まれ、1932（昭和7）年、

2023年11月13日受付 2024年2月28日受理

*1 熊本県球磨郡湯前町 1834-1

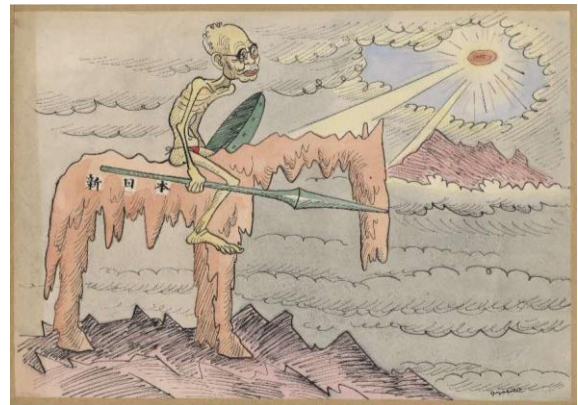
19歳で洋画家になる夢を持って太平洋美術学校(現・太平洋美術会研究所)に進学。農家の長男であったため、半ば勘当されるような形で進学したが、生活に困窮した際には両親から米の仕送りを受けたこともあった。その後、内職のつもりで始めた子ども向け漫画や新聞漫画の世界で成功。特に、実業之日本社『日本少年』で連載した「わが輩はノミである」(1933(昭和8)年)は人気を博し、ビクターレコードからレコードも発売された。日中戦争勃発後は3度の徴兵を受けたこともあり、漫画の仕事は数を減らしたが、戦後、1989(平成元)年の逝去まで、「毎日新聞」、『週刊言論』、『東洋経済』など大手メディアに風刺漫画を連載し活躍。主に辛辣な政治風刺の作風や、政治家の内面性を巧みに表現した似顔絵で知られるが、独特の閑雅なセンスが表れた風景画や、生涯の楽しみとした釣り・料理を題材とした水彩画・淡彩画、小林秀雄ら文化人との交遊を通して描かれた人物画、ユーモラスな絵本の挿絵などでも優れた作品を残している。

3. まんが美術館収蔵の那須良輔風刺画資料について

湯前まんが美術館が収蔵する那須良輔資料は、1 風刺漫画・2 風刺画・3 似顔絵・4 風景画・5 動植物画・6 絵本原画・7 写真・8 遺品等関連資料に大別される。この分類は、当館が収蔵品貸出事業としてホームページ等で公開している「出前まんが美術館」事業での分類を一部細分化したものである。資料の数としては、新聞・雑誌等のメディアに日々掲載され、自身のライフワークとしていた「1 風刺漫画」が最も多い。また、「2 風刺画」については、新聞・雑誌における風刺漫画の連載と並行して、個展の開催等のために個人的に制作に取り組んでいたと推測される、着色あり・大判の風刺画作品である。当館が那須の「風刺作品」として主に扱うのは1と2である。

「1 風刺漫画」については、その日その日に世間の話題をさらった国内外の事件や、日本の政治家の汚職、腐敗などを鋭く抉った、同時代性の高いものが多い。一方、「2 風刺画」については、社会全体を覆うムードを描いたもの、各国の首脳を登場させて数年来にわたる国際社会の潮流を戯画化したものなど、より広範かつ明快な(それゆえに高い風刺のセンスが求められる)主題を選んでいることがうかがえる。

本稿では、こうした大作の風刺画資料に絞って11点の作品を取り上げ、那須の風刺作家としての視野の広さ、表現の巧みさを当時の社会情勢と照らし合わせながら紹介する。



<幣原ドン・キホーテ> 1946(昭和21)年6月
27.3×38.2 cm 水彩・ペン

熱線に溶けたような馬(「新日本」の文字入り)を操る、痩せこけた内閣総理大臣・幣原喜重郎の図である。

戦後最初の内閣である東久邇宮内閣(東久邇宮成彦総理大臣)が総辞職した後、幣原は第44代内閣総理大臣に就任した。幣原内閣に課せられていたのは、前政権から続く憲法改正、省庁の再編、財閥解体といった難題に加え、GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)のマッカーサーにより示された、婦人参政権の賦与・労働組合の奨励・教育の自由主義化・秘密警察の廃止・経済機構の民主化という五大改革指令があった²⁾。

『ドン・キホーテ』は、騎士道物語にかぶれた中年男が痩せ馬に乗り、世の中の

不正を正そうと迷走する物語である。疲弊した日本を、戦勝国の意向に従って再建しようとする幣原の姿が、那須の目には馬上のドン・キホーテのように映っていたのかもしれない。



<新党乱立>制作年不詳
23.7×59.8 cm 水彩、ペン

制作年こそ記録が残っていないが、1955（昭和30）年11月の自由党と日本民主党の合併（保守合同）がなされていない時期に描かれたものと考えられる。また今作を『漫画家生活50年』の「再上京」の章に那須自身が収録していることを考えると、那須が戦後の疎開生活を終えて東京の「漫画集団」に再合流した1948（昭和23）年春以降、1955（昭和30）年11月以前の作と推定される⁽³⁾。戦後から1950年代前半にかけて、保守・革新を問わず雨後の筍のように乱立した新政党たちの変わり身の早さを風刺した作品である。

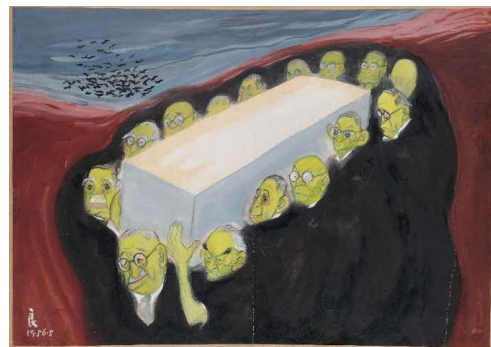


<うじむしどもはくたばれ(二つの踊る宗教)>
1956(昭和31)年4月
38.0×54.5 cm 水彩

1954（昭和29）年、アメリカはビキニ環礁で水爆実験を行い、日本の遠洋マグロ漁船第五福竜丸他1422隻が被爆した。

この事件は日本国内で大きな議論を呼び、翌1955（昭和30）年8月、第一回原水爆禁止世界大会が長崎・東京で開催された

(4)。原水爆禁止運動が国際的な規模に発展する一方、ソ連(U.S.S.R)やアメリカをはじめ、イギリス、中国、フランスなどは核開発に力を入れ、国際社会での立場を強めようとした。作品中央に位置するインドのネルー首相(白い服を着て頭の上で手を合わせている人物)は当時核軍縮に前向きだったが、そのインドも後年中国に触発される形で核開発に舵を切ることとなった。那須はこの他にも、「情容赦もあらばこそ」(1956(昭和31)年)、「おろかなる文明」(1958(昭和33)年8月)など、止まらない核開発競争を批判する作品を生涯にわたり発表した。なお、当時世間一般に「踊る宗教」と言えば、教祖・北村サヨによって戦後社会に広まった宗教法人「天照皇大神宮教」を指した⁽⁵⁾。



<下からす(I)>1956(昭和31)年5月
29.5×41.0 cm 水彩



<下からす(II)>1956(昭和31)年9月
29.5×41.0 cm 水彩

1956（昭和31）年5月版と9月版が存在する。それぞれ若干寸法や色彩が異なる

るが、顔・背景の描きこみが緻密で、より「葬儀」を想起させる配色が施された9月版が完成作と思われる。那須(1959)は、本作品について「自民党内の限りなき内紛は国民の目に、ようやく保守党は「白いひつぎ」をかつぎ出した。という印象をあたえた。病人の鳩山、重光、老人の三木、大野、大麻、黒い衣の一団は日本政治の坂道をよろめきながらおりてくる。どこかでからすの群が不吉なざわめきの声を立てているようだ。きこえたか、あの声。」(pp.74)と述べている。1955(昭和30)年の保守合同後の自民党内の派閥争い、旧弊的な体質をテーマにした作品である。



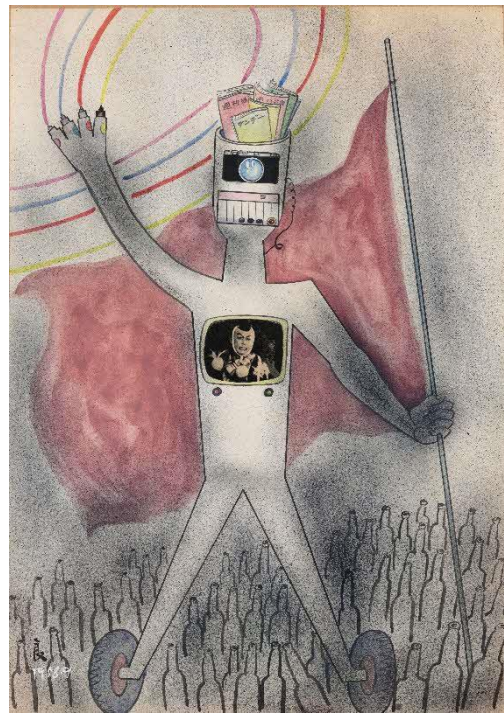
<ジャパニーズ・エデン> 1957(昭和32)年8月
38.0×53.0 cm 水彩・パステル

日本人女性と米兵との戯れを描いた作品である。男性の下半身をけもの(馬?)のように描いているのは、戦後多発した連合軍による買春行為や、婦女暴行事件などを暗喩したものだろうか。

なお、「北富士」は、1945(昭和20)年に連合軍に接收された北富士演習場を指していると考えられる。豊かな自然が残り、戦前は地元住民の入会権が黙認されていた同演習場の接收は地元忍野村の人々の反発を招き、激しい抗議活動が行われた(6)。

あらためて作品を見てみると、柵の外には民家と思しき建物が描かれ、柵の内側には「立入禁」と書かれた看板がある。空には戦闘機が飛び、ピストルを片手に不気味な笑みを浮かべる兵士がいる。時

代背景を強く反映した作品であることが窺える。



<へそのない人間> 1958(昭和33)年9月
54.6×38.3 cm 水彩・コラージュ

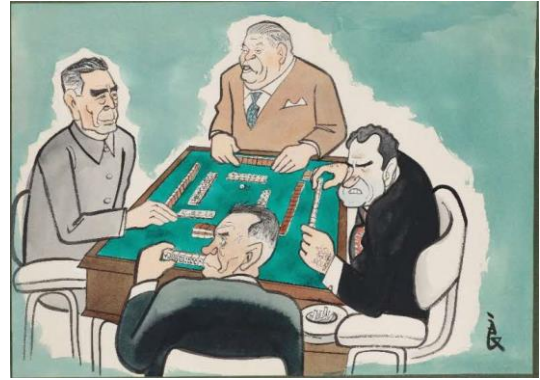
目はカメラ、歯はピアノの鍵盤、胸はテレビ、右手の指は絵の具のチューブのようなもの、足は自動車の車輪、そして頭には様々な大衆雑誌が詰まった機械じかけの「人間」が、無数に並んだ空の酒瓶(?)の上に旗を持って立っている。高度経済成長期を迎えた日本における、子供の習い事や電化製品の急激な普及、そして大量生産・大量消費を是とする新時代の大衆文化を風刺した作品。この時代の国民の消費活動を見てみると、前年(1957年)には瓶ビールの販売量が戦後最高を記録し(7)、作品が制作された1958(昭和33)年には、白黒テレビのNHK受信契約台数が100万台を超えた(8)。



<防空壕>1958(昭和33)年9月
53.3×37.0 cm 水彩

三人の政治家(右から河野一郎, 三木武夫, 左藤義詮)が国会議事堂という「防空壕」の中で耳を塞ぎ, 上空にはグラマン, ロッキードというアメリカの航空機メーカー2社の戦闘機が飛んでいる。暗く不穏な色の中には札束が飛び交っている。

当時の日本では, 第1次防衛力整備計画(戦後初の大規模軍備計画)に伴い, 航空自衛隊が新しい戦闘機の導入を検討していた。一度はグラマン社の機体の導入が決定したが, その後この決定についての不正疑惑が取りざたされた。疑惑とは, グラマン社が機体導入の見返りにリベート総額30億を岸内閣に約束していたのではないかというもので, 結局疑惑は立証されなかったものの, 導入する戦闘機はロッキード社の機体に変更された⁹⁾。三度の出征経験があり, 戦争に対する強い怒りを創作の原動力としてきた那須にしてみれば, 政治家個人の権益に結びつく軍備増強という疑いがつきまとうこの問題は, 描かずにはいられないテーマだっただろう。



<麻雀>制作年不詳
49.5×54.0 cm 水彩

日中国交正常化前後の作と推定される。アメリカ, ソ連, 中国, 日本(右から時計回りでニクソン, コスイギン, 周恩来, 大平正芳)が麻雀に興じている様子。麻雀という「中国の遊戯」の席で「パイ」(麻雀牌)を取り合うという巧みな構成が見られる。当時の国際情勢を反映した, 各国の微妙な表情の違いに注目したい。たとえば, この頃米中共同声明, 日中国交正常化等日米両国と歩み寄る姿勢を見せはじめた中国⁽¹⁰⁾に対し, ソ連は怒りの目を向け, アメリカはそのソ連の動きを警戒している様子がうかがえる。ちなみに, 日中国交正常化が果たされた1972(昭和47)年前後は, 阿佐田哲也の小説『麻雀放浪記』の流行や, 雑誌『近代麻雀』の創刊など, 日本に麻雀ブームが起きていた時代でもある。



<ロン・ヤス>制作年不詳
48.7×38.3 cm 水彩

1983(昭和58)年頃の作と推定される。この頃、中曽根康弘内閣総理大臣は、ロナルド・レーガン米大統領と「ロン」「ヤス」と愛称で呼び合う親密な関係を築き、日米安全保障体制の強化に努めた。また、国民にアメリカ製品の積極的な購入を呼びかけるなど、日本の輸出好調によって発生した貿易摩擦の解消を図った。1981(昭和56)年から1993(平成5)年にかけては、日本車輸出の自主規制が行われた⁽¹¹⁾。何から何まで頼り合う両国の関係をシニカルに描いた作品。



<ロッキード行革百鬼夜行>制作年不詳
19.0×47.0 cm 水彩

1983(昭和58)年頃の作と推定される。同年、中曽根内閣は三公社(日本専売公社、日本国有鉄道、日本電信電話公社)の民営化などを含む行政改革をスタート。同内閣はトップダウン方式の高いリーダーシ

ップを評価される一方で、田中角栄元首相の影響下にあるとされ、メディアからは「田中曽根内閣」などと揶揄された⁽¹²⁾。同年10月12日、ロッキード事件丸紅ルートの一審判決公判(東京地裁)が開かれ、田中元首相には懲役4年、追徴金5億円の実刑判決が下された。自民党内からも田中の議員辞職を要求する声が上がったが、田中は判決を真摯に受け止めるとしつつも辞職の意志はないと表明。同年12月の衆議院議員総選挙で、自民党はあわや過半数割れという厳しい結果となる。これを受け、第一次中曽根内閣は総辞職し、第二次内閣での「脱田中」を目指した⁽¹³⁾。権謀術数渦巻く不透明な政界を、魑魅魍魎が夜道を練り歩くさま＝「百鬼夜行」になぞらえた作品。

4.おわりに

ここで紹介した11点の風刺画は、当館が収蔵する那須良輔資料のごく一部である。大作の風刺画になればなるほど、風刺の意図は明快であり、調査は比較的スムーズに進むのだが、多い時には週に5、6回の連載があった「毎日新聞」連載の風刺漫画など、同時代性が高いニュースを取り扱った風刺漫画については、多くの資料を慎重に見ていく必要がある。現況は、原画展などの館内外展示を契機に、一度に30点から50点程度のペースで調査を進めている。当館には、私含め3名の学芸スタッフが令和4年度春より着任し、それまでは教育委員会の学芸員1名で行っていた資料調査・展示等の業務を3名で分担して行っている。ストーリーマンガが隆盛を迎える中、昭和という時代の終焉まで風刺漫画の孤墨を守り続けた那須良輔の業績は、近藤日出造、横山隆一、清水崑といった、戦前から戦後にかけて華々しく活躍した他の風刺漫画家達の仕事とはまた異なる輝きを放っている。その歴史的価値を正しく後世に伝える那須良輔研究を目指し、引き続き歩みを進めたい。

註

- (1) 連載第2回「巨木のつぶやき」・第14回「ガワツパの住む川」。
- (2) 佐々木・鶴見・富永・中村・正村・村上・編(1991), pp.302「五大改革指令」および pp.680-681「内務省」を参考に筆者要約。
- (3) 時系列については、「那須良輔年譜」(『追悼 那須良輔』湯前町教育委員会 1992)を参照した。
- (4) 西井・編(1989), pp.567「原水爆禁止世界大会」を参考に筆者要約。
- (5) 佐々木・鶴見・富永・中村・正村・村上・編(1991), pp.88「踊る宗教」を参考に筆者要約。
- (6) 西井・編(1989), pp.563「北富士演習場」, 佐々木・鶴見・富永・中村・正村・村上・編(1991), pp.798「富士山麓基地反対運動」を参考に筆者要約。
- (7) 「日本のビールの歴史年表・1949～1970 | 酒・飲料の歴史 | キリン歴史ミュージアム」, <https://museum.kirinholdings.com/history/nenpyo/bn_06.html>, 2024年2月9日最終アクセス。
- (8) 「5.16 テレビ受信契約 100万台突破」(牧野・編(1977), pp.149「世相・風俗」欄)。
- (9) 佐々木・鶴見・富永・中村・正村・村上・編(1991), pp.205「グラマン疑惑」を参考に筆者要約。
- (10) 佐々木・鶴見・富永・中村・正村・村上・編(1991), pp.1058「2.27 米中共同声明(米は台湾を中国の一部と認め、米兵引き揚げ確約)」, 同「9.25 田中首相、北京到着(初会談で国交正常化合意)、夕食会で過去の迷惑深く反省とあいさつ」。
- (11) 「高まる圧力を受けて日本政府と自動車業界は81年、対米自動車輸出台数を制限する「自主規制」を導入することになった。日米間の輸出自主規制は繊維や鉄鋼で前例があった。自動車の自主規制の枠は初年度

に168万台。80年の実績(182万台)を下回る水準に設定された。自主規制は93年度まで続くことになる」(「日米自動車摩擦 1970年代から繰り返す歴史 | 日本経済新聞」, <<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO35787290W8A920C1000000/>>, 2024年2月16日最終アクセス)。

- (12) 「中曽根政権は「閻将軍」といわれた田中氏の支援の下で誕生し、内閣は「田中曾根内閣」と揶揄(やゆ)されていた」(「友情」の陰で神経戦 田中角栄元首相への手紙 中曽根康弘氏「閻将軍」に勝てず | 産経新聞」, <<https://www.sankei.com/article/20180528-QZPSYDXU3ZLPDDTRRDLFTQPFEA/>>, 2024年2月16日最終アクセス)。
- (13) 佐々木・鶴見・富永・中村・正村・村上・編(1991), pp.681-682「中曽根内閣」を参考に筆者要約。

参考文献

<那須良輔著書・著作>

- ・那須良輔『吉田から岸へ』毎日新聞社 1959
- ・那須良輔『漫画家生活50年』平凡社 1985
- ・那須良輔『墨絵カット歳時記』知道出版 1986
- ・那須良輔「一筆啓上」(「熊本日新聞」1985.4～1987.3 毎月連載記事 熊本日新聞)

<その他>

- ・近藤日出造 他『漫画集団漫画集』漫画集団 1992
- ・佐々木毅・鶴見俊輔・富永健一・中村政則・正村公宏・村上陽一郎・編『戦後史大事典』三省堂 1991
- ・西井一夫・編『昭和史全記録 Chronicle 1926-1989』毎日新聞社 1989
- ・牧野喜久男・編『別冊 一億人の昭和史』

15 『昭和史写真年表 元年～51年』

毎日新聞社 1977

- ・牧野喜久男・編『別冊 一億人の昭和史 31 昭和新聞漫画史 笑いと風刺でつづる世相100年』毎日新聞社 1981
- ・湯前まんが美術館・編『湯前まんが美術館 館蔵品図録Ⅰ』湯前まんが美術館 1992
- ・横山隆一・他『追悼 那須良輔』湯前町教育委員会 1992